

『就実論叢』第42号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2013年2月28日 発行

母子・学生・教員による「親子フラ教室」の変容・成熟過程 —重層的な学びと遊びの場として—

**The Changing Process of a Hula School by Parents, Children, University Students
and Teachers: As a Space of Multistoried Learning and Playing.**

山 田 美 穂
下 山 真 衣

母子・学生・教員による「親子フラ教室」の 変容・成熟過程

—重層的な学びと遊びの場として—

The Changing Process of a Hula School by Parents, Children, University Students
and Teachers: As a Space of Multistoried Learning and Playing.

山 田 美 穂
下 山 真 衣

1. はじめに

2011年7月よりスタートした「親子フラ教室」の活動は、2012年10月で25回を数えた。教室スタート前後の成立・展開の過程については既に報告したが（山田・下山, 2012）、その後も様々な外的・内的要因の変化に伴い、活動場所、参加者、内容等に変更が加えられつつ、活動が継続されてきた。「子育て支援」および「実践的教育」の場としての変容・成熟の時期であったと言える。

そこで本稿では、2011年10月～2012年9月に実施された計18回の活動経過を報告し、親子フラ教室の変容・成熟過程を分析・考察する。

2. 活動経過

親子フラ教室は5回を1クールとしており、第1クールは前稿で報告した2011年7月～9月であった。本稿では、第2～4クールにあたる2011年10月～2012年9月の活動記録をもとに、経過を記述する。第1クールを含めた各クールの期間等の概要を表1に示す。

なお、毎回の活動の流れの概略は図1のようになる。各回終了後に学生スタッフが提出した活動記録の抜粋を表2～4に示す。

表1 第1～4クールの概要

		第1クール(#1～5) (※前稿にて報告)	第2クール(#6～11)	第3クール(#12～17)	第4クール(#18～23)
期 間		2011/7/14～2011/9/26	2011/10/17～2012/2/13	2012/2/28～2012/5/24	2012/6/7～2012/9/8
回 数		5回	6回(5回+茶話会)	6回(5回+茶話会)	6回 (5回+ファミリーご招待会)
活動場所		T608ダンス教室 →E101模擬保育室	E101模擬保育室	E101模擬保育室 →就実こども園育児支援室	就実こども園育児支援室 →同 遊戯室
参加者のべ人数 (1回あたり平均)	親子	30組(6組)	28組(4.7組)	27組(4.5組)	38組(6.3組)
	学生スタッフ	25人(5人)	27人(4.5人)	49人(8.2人)	42人(7人)
フラ練習曲		月の夜は	ホワイト・クリスマス	エ・フリマコウ	ハナレイムーン
子どものためのダンス曲		アロハ・エ・コモ・マイ	アロハ・エ・コモ・マイ	アロハ・エ・コモ・マイ	アロハ・エ・コモ・マイ

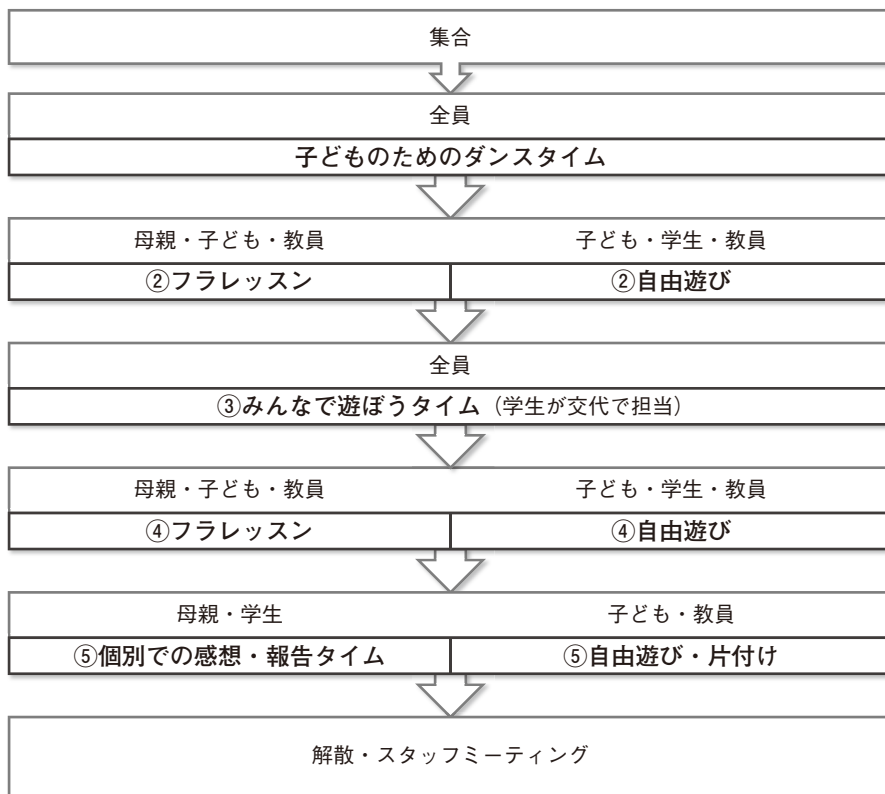


図1 毎回の活動の流れ

(1) 第2クール (2011/10/17~2012/2/13)

第1クールでは木曜3限を活動日としていたが、第2クールから後期授業期間に入り、時間的制約のため月曜3限に変更した。学校行事などのためなかなか予定通りに開催できず、間が空きがちとなったが、母親たちは「今日も楽しかった。フラの手が綺麗で踊っていて気持ちいい。付いていくのがやっとです」(#8・Cさんのコメント)のように、フラへの関心・意欲を持ち、どんどん上達していった。子どもたちも、フラ教室で見せる姿が毎回変化し、目覚ましい発達がスタッフを驚かせた。

そのような中で、いくつかの新たな試みのアイデアが生まれ、実現していった。きっかけとなったのは、11月に学生スタッフ、母親それぞれと「座談会」を行い、それまでの活動を振り返り、今後へ向けての希望を話し合う機会を持ったことだった(山田, 2012)。

座談会後に実現した企画として、まず学生が準備をしたクリスマス会が12/19(#9)に行われた(図2)。また、「もっと学生とゆっくり話がしてみたい」という母親からの要望を受けて、各クールの最終回に「茶話会」の回を設けてみることにした。この要望は、第1クールの「ひとことコーナー」で、学生スタッフがデートのエピソードを話したことをきっかけに、母親たちからも生き生きとした話が飛び出し、活動後も母親と学生とで自然なおしゃべりになったという出来事(#4)から続いていた流れであった。初めての「茶話会」(#11)では、フリートークに加え、母親たちのフラや学生の弾き語りなどのミニ発表会、ゲスト参加したアロマセラピストによる講習会のコーナーも設けた(図3)。

一方、学生グループからは、「お父さんたちにも参加してもらえる回を作る」というアイデアが生まれ、それが母親グループの座談会で「祖父母も含めたファミリー会」の構想へと膨み、第4クールでの開催とつながった。開催時(#23)の様子については後述する。このように、親子フラ教室の役割を確かめ合い、可能性を模索する動きが、この時期に生まれ、その後に続いていった。



図2 クリスマス会(#9)



図3 茶話会(#11)

表2 第2クール活動記録

母親	子ども	子ども性別	子ども月齢 (第2クール開始時)	母親の フラ経験	学生による活動記録(抜粋)
Aさん	aくん	男	1歳7か月	あり	とにかく車が大好きで、ほとんど車か電車の玩具で遊んでいました。家でも、車か電車の玩具で遊ぶらしく、絵本も図鑑も車だそうです。(＃8) 最初の方はママから離れず心配になったことを伝えると「いつもより私から離れない時間が多く、私も心配になった。でも後半は好きに遊んでくれて安心した」とおっしゃっていました。できる遊びがだんだん増えていることも伝えると、喜んでおられました。毎回来しみにしているので、次回もよろしくとのことでした。(＃9) aくんはいろんな言葉を話すようになったとお伝えしたところ、すごく喜んでいました。家でも車が好きで、「ブーブー」とよく言っているそう。最近口バのぬいぐるみを買って抱っこするようになり、活動中も人形を抱っこするのを見て、人形にも興味があるのかなとおっしゃっていた。(＃10) お母さんは、山田先生の報告書を読んで、「自分たちが楽しいばかりじゃなく、学生さんたちの役に立っていることが分かって、安心したし、良かった。」とおっしゃっていました。(＃7)
Bさん	bちゃん	女	1歳7か月	なし	うちでのbちゃんの様子を聞くと、「家ではボールが跳ばないように空気を半分くらい抜いているので、ここで思う存分遊べている」とおっしゃいました。(＃6) ママとお話して、遊んでいるときに1つのことに夢中で、とても集中力が続いていたことを伝えると、「家でも生活のリズムが崩れると、すごく怒るから自分の中でこだわりがあるのかな」と言われていました。同じ遊びを何時間でも平気ですと言われてたので、子どもでも性格によって遊び方が違うんだなと思いました。初めてのサンタさん、思ったより驚かなかったみたいでした。(＃9) 「フラはボロボロでした。スタートに戻ったみたいです。」(お母さんのコメント)(＃6)
Cさん	cちゃん	女	1歳5か月	なし	今日のフラの時間に黒いクレヨンやペンでお絵描きをしていたことをママさんに話したら、cちゃんは黒色が好きだそうです。「私も黒色が好きなので遺伝かなあ」とおっしゃっていた。(＃7) サンタさんが出てきたのはビックリした。でも、平気そうにしてたから良かった。(＃9) 「フラダンスは、手の動きが多くなり覚えるのが難しいです。」(お母さんのコメント)(＃6) 「今日も楽しかった。フラの手が綺麗で踊っていて気持ちいい。付いていくのがやっとです。」(お母さんのコメント)(＃8) 「今日は最後まで振りを覚えた。優雅で楽しい。家で、ムービーを見ながら一緒に踊ってる。」(お母さんのコメント)(＃9)
Dさん	dちゃん	女	1歳5か月	なし	フラ教室ではそうでもないのですが、外に出ると「抱っこして」と甘えるそうです。(＃7) 前回は主にdちゃんと、風船、お絵かき、ままごと、アヒルのお散歩、などをして遊びました。いろんなものに興味深々で、たくさんの種類のおもちゃで遊んでいました。dちゃんママとお話して、普段どんな遊びをしているかを聞くと、やっぱり、ままごとやお絵かきはよくしていると、言われていました。あとは、ママさんが料理しているのを隣でじーっと見ているらしく、もうちょっと大きくなってお手伝いしてくれるのを楽しみにしていました。(＃8)
Eさん	eちゃん	女	1歳4か月	なし	ママさんによると、eちゃんは家ではままごとはほとんどしないけど、フラの時間はフライパンにものを入れて出してを繰り返していたので成長を感じるそうです。(＃6) サンタさんは、朝もクリスマス会で見たらしく、そのときも泣いたそうで、お菓子を直接もらえただけでも奇跡とおっしゃっていた。(＃9) eちゃんもフラ教室に慣れてきて、いろんなおもちゃで遊んでいました。たくさん笑顔が見れて嬉しかったです。(＃10) 「フラダンスを始めて、今になってすごい楽しくなってきて。それでバウスカート買ってフラダンスを趣味の1つとしてしていきたいと思っています。」(お母さんのコメント)(＃6) お母さんは、「フラは、フラダンスに込められた思いを知って、癒されるし元気が出る」とおっしゃっていた。(＃8)
活動全体について					・もうちょっと、ママさんたちとしゃべれたらよかったなと思いました(＃11) ・いつもより子どもたちが元気で大変だった。お母さんたちのフラダンスを、初めてちゃんと見てびっくりした。最初の時とは空気も違って、すごいなと思って、感動しました。次回まで1か月空くので、子どもたちに忘れられそうで不安。(＃11)

(2) 第3クール (2012/2/28~2012/5/24)

2・3月(3回)は学生の春休み期間中であり、子どもたちが体調を崩す季節であることから、参加者が少ない回もあったが、授業期間中よりもゆったりと、正味90分程度の活動を

行うことができた。Cさんより、Cさん母子が参加している親子サークルのイベントに出張してフラを披露するという新たな提案もなされた。

新年度に入り、活動日が木曜3限に戻った。継続的に参加していた学生スタッフ2名は授業のため参加できなくなったものの、新1年生の加入により、新年度最初の活動日4/19（#15）には学生スタッフ数が15名と、活動開始以来最多となった。その後、急遽会場を変更せざるを得なくなるというトラブルもあったが、5/10（#16）から就実こども園2階の子育て支援室を借りられることとなり、活動を続けることができた。

また、4月から、集団遊びの時間として「みんなで遊ぼうタイム」を設定した。それまでのスタッフミーティングで、子どもたちの発達とともに遊び方が変化し、お互いの行動を真似したりおもちゃを一緒に使ったりという様子が見られるようになっていたことから、そろそろ集団遊びも取り入れていけるのではという話が出るようになっていた。そこで、学生スタッフが増えたタイミングを活かして始めてみることにした。初回（#16）から担当の学生に準備を任せましたが、学生だけで相談してアンパンマンの手遊びを準備し、その後の流れを作っていた（図4）。



図4 みんなであそぼうタイム

さらに、4月からの大きな変更点として、親子フラ教室が学科の行事として公的に位置付けられたことが挙げられる。また、毎回の活動記録を、学科に用意された各種ボランティア活動用の記録用紙に記入することにした。これらにより、記録の内容にも質的・量的な変化がみられた。表3・4に示したように、記録用紙を使い始めた第3クール後半からは1人1人の子どもの遊びの様子や母親との対話の記述に加え、活動全体について振り返り、自ら課題を発見していることが記されるようになっていった。

5月から、新たに2組の親子（Gさん、Hさん）が参加し、計7組が継続的に参加されることとなった。

第3クール最終回に行われた茶話会（#17）では、まず小グループでのテーマトークを企画した。気軽に話しやすいように「女の生きる道」と題し、母親が経験してきた仕事・結婚・出産・育児について、学生に向けて語ってもらった。ミニ発表会では、1人の学生が自作曲を披露した。弾き語りの希望だったものの会場の制約のためできず、MDに録音した伴奏に合わせて歌う形にせざるを得なかったが、子どもたちが曲に合わせてリズムを取ったり、指揮者の真似をしたり、合わせて歌おうとしたりという姿が、和やかな空気を生み出した。さらに、フラの発表の時には、Bさんから「学生も一緒に踊ってほしい」とリクエストがあり、ほぼ全員が一緒に踊った。

表3 第3クール活動記録

母 親	子 ど も	子 ど も 性 別	(第3 クール 開始 時 月 齢)	母 親 の フ ラ 経 験	学生による活動記録（抜粋）	
					第3クール前半（#12～#14）	第3クール後半（#15～#17）
Aさん	aくん	男	1歳11か月	あり	よくしゃべるようになった。I語文になってびびりした。活発になって動きが止まることがなくなった。これから室内をかけずり回るようになるか?（#12） 「ブーブー描いて」と言われて書いたら、「aも描く」と。「aも」が口癖。よく歌いながら踊っている。好きな学生に「おいで」と言えずに照れていた。ちょっと離れて座ったり。（#13） ママとお話して、フラはいつもと同様楽しくて、aくんも周りが女の子だからか、とても男の子っぽく見えるとされていました。遊び方も言葉の使い方も変わってきて、成長してるのが分かるし楽しいとのことでした。（#13）	おままと「はい、どうぞ」とたくさん渡してくれた。「ありがとう」と言うときごく嬉しそうな顔だった（#17）
Bさん	bちゃん	女	1歳11か月	なし	踊りをどんどん覚えていて、ここでは他の遊びがしたくてそんなに本気で踊っていないが、家ではもつとすごくて、お客さんが来ると、踊りを見てももらいたくてショータイムのようにしているそう。今日大学の構内に入ったら、フラの曲を歌ったので、踊るところだとわかってるんだなと思った、とママさんがおっしゃっていた。（#12） ここに来ると、他の子どもたちがいて、その子に対して話しかけてるわけじゃなくて、誰かが話してるとつられて言葉が発したり、自分がやらない遊びも誰かがやってたら興味を持って行ってみるから、遊びの幅が広がっていいとおっしゃっていた。音が出るのが気に入っていた。（#13） お母さんは「フラがめっちゃ楽しい、毎回いろんな発見があって楽しい」と言われるので、「わたし子どもたちと遊んでると発見がある、今日はみんなよく走ってしゃべってたんですよ」とわたしが言うとき、「そうよね」とうなずいてくださった。（#13）	
Cさん	cちゃん	女	1歳10か月	なし	まぜまぜするのが好き。家でも料理番組を見て真似するらしい。二語文も出てきた。（#12） 元気でよく笑う。絶対ものを持って歩く。お気に入りのものをママのところに持っていく。ザルとか。今日はまずフライパンだった。今日はよく踊ってくれた。（#13）	最近、「いやいや」が始まって、よく反抗したり、逃げたりするようになり、お母さんも困っているらしい。今回、「ママ」という言葉をよく聞いたので、珍しいなと思い聞いてみると、最近やっとおっぱいをやめられるようになり、それからよく「ママ」と言うようになったらしい。（#15） cちゃんの方から抱っこや高い高いを求めてくれて嬉しかった。（#16）
Dさん	dちゃん	女	1歳9か月	なし	言葉数が増えた。家でも「ゴミ捨てて」「ドア閉めて」等の指示をするとちゃんとわかってできるので、成長したなとお母さん。1人遊びが好きなタイプのよう。おもちゃを取られても譲ってしまう。（#12） 最初20分くらいは人見知りっぽくて「ママ」って言ってたけど、後は大暴走で破壊しまくって。おもちゃを片付けたら全部出される、の繰り返しで、結局負けた。ずっと走って、お母さんも大変と言っていた。学生を後ろからだっこしてくれそうになった。みんなが船に乗ろうとする時も、学生を真似して一緒に支えようとしてくれた。（#13） 動物の名前もわかるし、お人形を抱っこして「赤ちゃん」、手を持って「赤ちゃんバイバイ」と言ったり。窓際に抱っこしていたら、外に清掃のおばちゃんが見えて、「降りよう、バイバイして」と言ったらずっとおばちゃんとバイバイしていた。（#14）	この前は泣いてお母さんにくっついていたcちゃんが、外に出るのを見て私に「くんに帽子あげて」と言ってくれたので驚いた。ちゃんと人のことを見ていてすごい（#16） 最近、赤ちゃんと触れ合う会に行ったら、1歳の頃はほとんど関心を示さなかったのに、今回は「かわいい。赤ちゃん。」と抱っこしていた。家に帰ってもお人形を抱っこしておっぱいをあげる真似っこをしたりしている。（#16） やっぱり赤ちゃんが気になるようで、お人形の赤ちゃんをdちゃんと一緒に抱っこしたら喜んでくれた。環境に慣れてきたのか、前ほどお母さんにべったりでなくなってきた。みんなの前で踊ったり、歌ったりしていて、人のことをよく見ていると感じた（#17）
Eさん	eちゃん	女	1歳8か月	なし	ティッシュを気に入って、鼻を拭きたがっていた。今日は全然泣かなかった。おもちゃの取り合いになると泣きそうになるので、学生がおもちゃを差し出してあげたりしていた。この子どもたちの名前を憶えているようで、「cちゃんのところ行っておいで」って言った行ったり。子どもたち同士でわかるみたい。言葉が増えてきて、最近また新しいこと言うようになったらしい。1年前はハイハイしたばかりだったのに、1年経ったらこんなに成長するんだねという話をママさんとして、すごいなと思った。（#13） 集団が好きでなく。一人でマイペースで遊びたい感じがする。みんなが集まりだしたら、eちゃんが他へ行く（#13） 「パパ、パパ」と何回も言っていた。家ではあまり言わないが、目の前からいなくなると探す感じで言うそう。よく笑うようになったことを伝えると、家でもよく笑うしよく叫んで、外でも聞こえることもあるくらいらしい。今日は、子どもたちが少なかった分、eちゃんがのびのびと元気だった。（#14）	お母さんは、「最初より環境にも慣れてきていて成長したと思った、言葉がまだだが、フラ教室でいろいろな人に話しかけられて、刺激を受けられるようになっていいな」とおっしゃっていた。（#16） 最近はとても活発で、よく走り回っているそう。外出先でフラのステージをやっていて、終わりまでずっと一緒に踊っていたらしい。今日も一緒に踊っていたのですごいなと思った。（#16） 前回の「みんなで遊ぼうタイム」はあまり興味が無いように見えたが、今回は楽しそうにしていた。フラを踊ったりして、憶えているようでよかった（#17）

Gさん	gくん	男	(初参加時#16) 2歳1か月	なし		電車が大好きだった。乗り物にとても詳しくて、子どもの興味は本当にたくさんを学ぶ力があるのだなあと感じさせていただいた。(＃16) 乗り物や動物のバスルを見て、「トラック」「ショベルカー」「ぞう」「きりん」と、きちんとわかっていた。鳴き声の真似もしていた(＃17) aくんと一緒にでんしゃごっこをした。初めaくんと二人で線路をつないで駅を作って遊んでいると、くんがやってきた。すると二人は無言で見合ったり、どちらかが置いたものを動かしたりと、まだ打ち解けていないようだった(＃17)
Hさん	hちゃん	女	(初参加時#17) 1歳11か月	なし		初参加だったが、「みんなで遊ぼうタイム」の時に、ニコニコしながら手遊びをしてくれた(＃17)
活動全体について					#15	・初めは緊張したが、2年生が子どもたちと遊んでいるのを見て、だんだん楽しく接することができたのでよかった。 ・子どもだけでなく自分自身も楽しむことが大切なんだと感じた。 ・1年生が初めてにもかかわらず積極的に子どもたちと遊んでいてすごいなあと思った。お母さん方とも積極的に話をされていて感心した。
					#16	・「みんなで遊ぼうタイム」のゲームを一生懸命探して考えて、いざやってみると、子どもたちが集まってくれなくて、最終的にちょっと泣かせてしまってたふたしてしまった。協力してもらってなんとかできて一安心でした。 ・初めて子ども園ということ、少し緊張したが、落ち着ける雰囲気があった。 ・“ダメ”と言うばかりでなく、“こっちもやってみよう”と誘導していくことも大切だと学んだ。
					#17	・子ども園での2回目の実施なので、前回よりスタッフも子どもたちもリラックスできていた。初参加の親子さんもいたが、全く違和感なかったのも、このボランティアに関わる全員の空気づくりがうまくできていると思った。 ・子どもたちが部屋の外に飛び出して、階段付近に行ってしまう危ないと感じることが何度あったので、気を付けなければいけないと思った。 ・子どもたちとだんだん仲良くなれてきて、こっちに来て笑いかけてくれるだけで幸せになれる。 ○茶話会の感想／お母さんたちがすごく気さくで、優しく、面白かった／皆さん共通の悩み(子どものかんしゃくはどうしたらいいかわからない)を抱えているんだなと思った。それでも子どもが好きであることに変わりはないという言葉が印象的だった／すごく緊張してしまって、自分からお母さんたちに話しかけることができなかったのが残念だった。もっと積極的に子どもさんの話を聞いたりして、お母さん方からも色々なことを教えてもらえるようになってほしいと思った。

(3) 第4クール(2012/6/7～2012/9/8)

6月、筆者(山田)より、なでしこ祭の「ダンス大会」企画に有志で出場することを提案した。積極的に参加を希望する人、不安や抵抗感を示す人、と母親も学生も反応は様々であった。普段の活動とは質の異なるイベントであるため、参加が強制にならないよう配慮し、自由参加とした。最終的には全員の親子と5人の学生が参加した。

#21に、こども園の行事の関係で急遽1階の遊戯室を借りて活動したことをきっかけに、その後は遊戯室を使わせてもらうことになった。この回から新たに1組の親子(Iさん)が参加し、計8組に増えたこと、子どもたちの動きが発達とともに活発になってきていたこと

から、新たな広い会場は、子どもたちにとっても学生にとっても新鮮で遊びやすい場所であるようだった。

また、参加者が増えたことに加え、活動回数を重ねてきたことから、徐々に子どもたちの個性が見えるようになってきた。それに応じ、母親たちからも様々な悩みが打ち明けられるようになり、母親同士で相談し合う姿がみられたり、スタッフに語られる場面もあった。そのような時に学生スタッフから活動中の遊びの様子を伝えることで、新たな視点を提供することもあれば、何か助言をせねばと力が入ってしまうこともあるようだった。教員からは、良い助言をすることを目指すのではなく、普段の様子をしっかりと聴き、活動中の様子を丁寧伝えるよう指導した。「他の子とあまり接しようとしなないことをお母さんが心配されていた。が、一緒に遊んでいると、確かに子どもたち同士ではあまり遊んだりしていなかったが、以前よりもスタッフに対して笑ったり反応したりすることが多くなった気がするので、もう少し環境に慣れると、他の子どもたちともっと交流が増えるのかなと思う。(略)遊び方の工夫として、好きな遊びをいくつか教えてもらったので、実践していきたい(#20)」というように、母親と心配や工夫を共有したり、「1年前はよく泣いていたけど、今はあまり泣くこともなくみんなと遊ぶようにもなったことを、『学生のおかげ』と言っていただけで、本当に嬉しかった」(#18)というように、子どもたちの成長と一緒に喜ぶ存在であることを、支援の基本として重視した。

子どもたちだけでなく、母親自身の個性も発揮されるようになっていった。たとえば、母親たち同士で自作した髪飾りをつけて練習したり、Eさん親子がハワイアン柄の手作り服を着てきたり、といったことが見られ、そういったスキルやセンスが「ダンス大会」の準備に



図5 ファミリーご招待会①(#23)

9/8(#23)には初めての「ファミリーご招待会」を開催した(図5・6)。7組の参加で、うち父親3名と祖母1名が初参加であった。初の土曜開催であり、学生スタッフも過半数が初参加という、チャレンジの回であったが、子どもたちはいつもよりも母親



図6 ファミリーご招待会②(#23)

も活かされていった。また、Eさんの母国語である中国語のフラを創作するというアイデアも生まれた。

から離れてのびのびと遊んでおり、父親や祖母と一緒にいることで安心している姿を見ることができた。また、これまで練習してきたフラをスタッフ以外の人に披露することも初めてだったが、家族に見守られている温かい雰囲気を支えられ、自信につながる回となった。

表4 第4クール活動記録

母親	子ども	子ども性別	子ども月齢 (第4クール開始時)	母親の フラ経験	学生による活動記録(抜粋)
Aさん	aくん	男	2歳2か月	あり	「アロハ・エ・コモ・マイ」の時、一緒にやろうと誘ったら、泣きそうな顔でお母さんにくっついてしまった。お母さんによると眠かったそう(#18) お絵かきにはあまり乗り気でなかったが、電車遊びは楽しんでた。今日は「いやだ!」といっぱい言っていた。Fくんとはまだ慣れていないようだった。クルマ遊びが一番好きみたいで、やっぱり男の子だなあと考えた(#19) 初めはあまり話してくれなかったaくんが、最後の方はすごくたくさん話してくれたことが嬉しかった(#23)
Bさん	bちゃん	女	2歳2か月	なし	一緒に手遊びをしようとしたが、あまり興味を持ってもらえなかった。もっと楽しめる工夫が必要かもしれない(#19) 単語を言って私たちに伝えようとしてすごいと思った。蛇口を見つけたら、手を洗う動作をよくしていた。お母さんにお話を訊くと、お店の中や外でも、蛇口っぽいものを見つけるとやるらしい。大きな遊具で遊ぶとき、他の子は普通にのぼるのに、bちゃんはワニ歩きみたいなのをして楽しんでた。(#21) 絶好調で、いろんな人に絡んでもらいいに行っていた(#23)
Cさん	cちゃん	女	2歳1か月	なし	前回も今回も抱っこに大喜びで、すごく笑ってくれるので嬉しかった。動くことがとても好きみたいで、おんぶをねだってきて、おんぶして走るとすごく喜んでた。今日はよく水道で手を洗っていた(#18) 笑顔で抱きついてきてくれるのがすごくかわいかった。前回と同じで、よく手を水で洗っていた。家で「大きな栗の木の下で」をよくしているそう(#19) 嬉しそうにキヤーと走り回っていて、それを追いかけて高い高いや飛行機をする他の学生がすごくお姉さんらしくて、あんなふうに接することができるようにになりたいと思った(#19) 「大きな栗の木の下で」をやってみせてくれた(#21)
Dさん	dちゃん	女	2歳0か月	なし	二階に上がってすぐお人形の赤ちゃんのベッドを見に行ったら、お人形がなくて少し戸惑っていた。片付けの時に人形を見つけたdちゃんは、よだれかけで口を拭いてあげたり、「お昼寝させてあげて」と言っていた。(#18) いつもより多く遊んでいた気がして嬉しかった。最近外遊びが好きなようで、1日2回は窓から脱走して少し危険だそう。ママにべったりで、お皿洗いを手伝っている。今年度に入っておとなしいのは、場馴れしていないのと、人がいっぱいなのと、少し狭いからかな、とママさんはおっしゃっていた。(#20) 来た時昼寝が足りず、機嫌が悪そうだったが、周りで子どもたちが遊んでいるのを見ると、今までで一番いきいきと遊んでいた。他の子が反対側から遊びに来ると譲ってあげていた。いつもより笑顔で遊んでいて嬉しかった。お母さんとお話をさせてもらって、やっぱり子育てと家事の両立は忙しいんだなあと考えた(#21)
Eさん	eちゃん	女	1歳11か月	なし	eちゃんがかいていたズボン(ハイビスカス柄)はお母さんの手作りだそう。このフラ教室がなかったら、作ろうとしなかっただろうし、この場を通じて趣味につながって嬉しいと言っていた。Eちゃんは「アロハ・エ・コモ・マイ」も踊ってくれていたの、家でそのことを聞くと、フラの音楽をかけてとお願いするそうで、聞くとき機嫌が良いそう。また、1年前はよく泣いていたけど、今はあまり泣くこともなくみんなと遊ぶようになったことを、「学生のおかげ」と言っていただけで、本当に嬉しかった。「彼氏とうまくいってる?」など、話も盛り上がり、お母さん方とも会話の幅が広がってとても楽しい。今までしてきたことが、今につながっていることが実感できて嬉しい(#18) ママさんと一緒にダンスをしていたが、笑顔でとても楽しそうだった。(#20) ずっとお母さんのそばを離れなかった。お母さんに訊くと、最近また少し甘えるようになったらしい。が、お母さんがいると、公園などでもすごく動き回って大変と言われていた(#21) 1年前に比べると、本当によく笑うようになった(#23)
Gさん	gくん	男	2歳1か月	なし	ままごとで、自分で作ったご飯を「はい、どうぞ」と言いながら出してくれるので嬉しかった。「スプーン」「しゅうゆ」「おたま」「おさら」と、色々な台所用品の使い方を全部わかっているようでびっくりした。(#18) うさぎのパベットに手を入れて、誰それかまわす攻撃に行っていてとてもかわいかった。環境に慣れてきたのか、前回に比べて、学生とも遊んでくれるようになり、子どもたちともコミュニケーションをとるようになってきた(#19) 「dちゃん?」と仲良しのdちゃんを探していて、ほほえましかった(#23)

Hさん	hちゃん	女	1歳11か月	なし	1人で遊ぶのが好きで、他の子とあまり接しとしないことをお母さんが心配されていた。が、一緒に遊んでいると、確かに子どもたち同士ではあまり遊んだりしていなかったが、以前よりもスタッフに対して笑ったり反応したりすることが多くなった気がする。もう少し環境に慣れると、他の子どもたちとももっと交流が増えるのかなと思う。風船遊びが好きだそうで、今日風船があることにお母さんも喜ばれていた。遊び方の工夫として、好きな遊びをいくつか教えてもらったので、実践していきたい。(＃20) とても活発だった。お母さんに聞くと、外ではとても活発で走り回っているそう。でも家の中ではとてもおとなしく、寝転んでテレビを見たりしているらしい。一人っ子ということもあって、物を独り占めしたりしてしまうらしい。(＃22)
Iさん	iくん	男	3歳1か月 (初参加時 ＃21)	なし	人見知りがなく、終始笑顔でかわいかった。風船をふくませたくてもふくらまないので、私に「はい」と渡してきたり、口にくわえて空気を入れるとつぶして喜んでた。3歳ということで、他の子よりも活発で走り回っていた(＃21) ピアノに興味津々で、なかなかやめようとしせず、ピアノが好きなのかなと思った(＃23)
活動全体について					<p>＃18</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外で子どもたちが遊んでいるのを見て、いつもよりのびのびしているように感じた。先輩が手洗いを教えているのを見てすごいなあと思った。 ・子どもたちとたくさんおしゃべりをしたりかかわれるようになってきたけど、たまに黙ってしまったたり、子どものしゃべっていることに答えてあげなくて不安そうな顔にさせてしまったので悲しかった。 ・みんなよく言葉をしゃべるようになった。今までは「クルマ」「電車」など単語だけを話していたが、今回お子さんたちと遊んでいると、「電車来るかなあ?」「まだ来ないねえ」など、単語ではなくて文章で喋るようになっていいる子が結構いた。また、おもちゃを取り合いそうになったとき、「みんなで交代で遊ぼうね!」と言うと、泣いてしまうかなと不安になったが、「みんなで交代」と何度もつぶやきながら我慢してくれた。フラ教室でお子さんたちに会うたびにみんな少しずつ成長しているの、で、すごく嬉しくてとても楽しい。
					<p>＃19</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子フラに参加し始めてから、音楽に合わせて身体を動かすのが楽しいことがわかってきた。 ・やっぱりお母さんのところへ行ってしまう子どもさんが多く、近くにお母さんがいることで安心するんだなあと思った。そういう時に、一緒に遊ぼう!とうまく声をかけられたらいいなと思った。 ・雨だったので外に出られず、男の子は少し物足りないようだった。でもだんだん子どもたちが慣れてきてくれて、会話を少しずつしてくれて嬉しかった。 ・子どもたちがたくさん動けるようになった分、おもちゃで遊ぶ時間も減ったように思う。何人かで一緒に遊び、協調性が見られるようにもなった。会うたびに成長が見られて嬉しい。 ・体調が良くない子を特に気を付けて見るようにしていた。次回から風船とシャボン玉を復活させたい。
					<p>＃20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつもと違い、ひとりで2～3人のお子さんと遊ぶので大変だったが、みんな環境にも慣れてきたようで、落ち着いていたので助かった。先輩方にとても頼ってしまっていたので、もっと臨機応変に対応できるよう努力していきたい。 ・女の子たちがキーボードに興味津々だった。 ・活動場所が変わり、子どもたちとお母さんの距離が近くなったためか、以前より子どもたちがお母さんにくっついていいることが多くなったように感じる。どうやったら子どもの気がわかるのか、お母さん方からもヒントをいただいて、挑戦していきたい。
					<p>＃21</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所が変わり、今までよりも活発に遊べるようになったので、活動しやすかった。風船を飛ばしてあげるとみんなとても喜んでいたのですごく可愛らしかった。 ・子どもと遊ぶ中でうまく声掛けがしてあげられないところがあったので、治していきたい。子どもの目線に合わせた体勢を取ることを忘れないようにしたい。 ・久しぶりだったので子どもたちと距離ができたと感じた。眠ったおにんに注意を向けていなかったで、他の子たちが起こしてしまい、また泣き出させてしまった。興味を逸らす技術も身に付けねばと思った。
					<p>＃23</p> <ul style="list-style-type: none"> ・じっくり見ていると、子ども同士にも人間関係があって面白かった。活発な子、無口な子、恥ずかしがりな子…と、小さな子どもたちにもいろんな性格があり、ただ一緒に遊ぶだけではなく、少し離れた場所ですこし観察してみてもいろんな発見がある!子どもってすごいなあと思った。 ・お母さんたちは、子どもたちが自分から離れ、来ている子と遊んだり、学生ボランティアと遊ぶことを望んでいて、それはとても嬉しいことなのだと分かった。子どもたちには笑顔で話しかけることが大切で、それによって子どもたちも笑顔になると分かった。最初は子どもたちに逃げられてしまて、今日大丈夫かなと思ったけれど、時間が経つにつれて一緒に遊べるようになってよかった。お母さんに、「うちの子と遊んでくれてありがとう」と言われて嬉しかった。 ・お父さんやおばあちゃんがいることによって、子どもたちはいつもののびのびと自由に遊んでいた気がする。いつもママさんにくっついていいる子たちも、離れて遊んでいて、嬉しかった。

3. 考察

(1) 第2～4クールにおける活動の展開と深化

活動経過をまとめると、いくつかの大きな流れが浮かび上がってくる。それらを「外への展開」「学生企画の実現」「母親の創造性の発現」「親子と学生の関係の深まり」「学生間の学び合い」と名付け、図7に示す。

第2クール（#6～11）	第3クール（#12～17）	第4クール（#18～23）
	(外への展開) → ・公民館での発表の提案 ・教室の位置づけの明確化 ・子ども園に会場変更（#15～） ・新1年生の参加（#15～） ・Gさん親子参加（#16～） ・Hさん親子参加（#17～）	・ダンス甲子園出場の提案 ・ファミリーご招待会の試み（#23） ・はさん親子参加（#21～）
(母たちの主体性の発現) → ・バスケット購入、髪飾りの自作	・中国語曲でのフラ創作のアイデア	・「一緒に踊って」学生へのリクエスト
(学生企画の実現) → ・クリスマス会（#9） ・自作曲の披露、楽器演奏の導入（#11）	・みんなであそぼうタイム（#15～）	
(親子と学生の関係の深まり) → ・人生の先輩・後輩としての交流		
	(学生間の学び合い) → ・相互的な観察学習	

図7 第2～4クールで生じた展開

① 外への展開

第1クールに比べ、第2～4クールでは、空間的な意味でも社会的な意味でも、「外」への展開が生じた。

まず、前稿において、今後の活動上の課題として、教室の位置づけを模索することを挙げたが、平成24年度から親子フラ教室が学科行事として認められ、対外的な位置づけが明確になった。

また、新年度のスタートと同時に会場が変更となり、大学のキャンパスの外にあるこども園の一室を借りることになった。思いがけない変更であったが、こども園スタッフの理解と協力により、良い刺激を受けながら、参加人数が増加にも対応することができた。

さらに、父親や祖父母も参加しやすいように土曜に設定した「ファミリーご招待会」の開催（#23）、なでしこ祭の「ダンス大会」への出場（10/21）、親子サークルでの出張フラ（11/15:次稿にて報告）といった、「ダンスチームとして観客に踊りを見てもらう機会」ができた。活動の中で醸成されたものを外へ向けて示す、という行為が無理なく可能になるところまで、親子フラ教室が成熟してきたと言える。

② 学生企画の実現

学生スタッフが全体をリードしパフォーマンスをする企画がいくつか実現した。発案したのは教員スタッフからであったが、「クリスマス会」ではプレゼントの購入、男子学生へのサンタ役依頼、衣装の用意など、「みんなで遊ぼうタイム」では手遊びの曲選定、練習、子

どもたちへの声のかけ方などを、学生同士で準備し、実践する時間を作ることができていた。このような経験は、対人支援の現場で求められる、コーディネーター的、パフォーマー的、プロデューサー的役割を実体験する学びとなり得ると考えられる。

また、茶話会での学生の自作曲の披露は学生からの発案で実現したものであった。フラと直接関係しないものを取り入れることは冒険ではあったが、子どもたちが予想以上に反応をし、このことがフラのピアノ生伴奏や子どもたちの楽器遊びへと展開していった。今後、その場の雰囲気に合わせて即興的に楽器演奏を取り入れていくことができれば、フラもダンスセラピーや音楽療法的なセッションとして展開する可能性もあり（町田，2012）、今後模索していく価値があるだろう。

③ 母親の創造性の発現

母親たちから、新しい提案や行動がなされた。親子フラ教室ではパウスカート（フラ練習用のギャザースカート）の着用は強制していないが、母親たちは自ら好みのデザインを選び、購入して着用している。さらに大人用と子ども用の花の髪飾りを手作りするなど、女性ならではの華やかな装いを楽しむようになっていった。自分で選んだパウスカートのデザインや、手作りした髪飾り、そしてフラの踊り方などに、それぞれの個性が反映されている。

また、茶話会でBさんが学生スタッフに「照れるから一緒に踊ってほしい」と誘い、皆で踊るという出来事は、母親からの提案であったからこそ自然にできたことであった。Cさんからの公民館企画、Eさんの母国語である中国語のフラを創作しようというアイデアなど、大学の中から外へ、そして異なる文化を融合していこうという展開もみられた。

これらの案が、単なる要望ではなく、驚くほど適切な妙案であったことも、特筆すべきことである。母親たちにとっても、受動的に参加するだけではなく、作り手としてこの場を楽しんでいるのだということが確認できた。元々フラ経験者であるAさんと、絶妙なアイデアが光るBさんが母親たちの中心となってくれていたことに加え、これまで全て母親同士の紹介で参加者を募ってきたことが、積極性を支える要因として作用しているように思われる。

④ 親子と学生の関係の深まり

活動開始時から続いている、個別での感想・報告タイムでは、学生スタッフが子どもたちの自由遊びの様子を母親に、母親が普段の家庭での様子を学生スタッフに伝えることで、子どもたちの成長や個性についての理解が深まり、喜び合うという関係が育っていった。「ママとお話して（中略）遊び方も言葉の使い方も変わってきて、成長してるのが分かるし楽しいとのことでした」（#13）「お母さんは『フラがめちゃ楽しい、毎回いろんな発見があって楽しい』と言われるので、「私も子どもたちと遊んでると発見がある、今日はみんなよく走ってしゃべってたんですよ」と私が言うと、『そうよね』とうなずいてくださった」（#13）などの記録に、そのことが示されている。ただ、時間の制約上、感想・報告タイムは毎回10分

程度しかとれず、第1期よりも参加者が増えたことから、お互いの名前と顔が一致するまでには至っていない。セミクロードの活動の開放性と凝集性のバランスを保ちつつ、お互いの信頼関係を深めていくことが、引き続き課題となるだろう。

また、第1クールから、学生の「恋バナ」などをきっかけにして生まれていた、「女性同士」という意識が、茶話会（#23）での「女の生きる道」のテーマトークが成立する土台となった。「子どもの母親」「子どもとかかわるスタッフ」という、子どもたちを介した役割による関係だけでなく、同じ時代に生きている女性の先輩・後輩としての関係である。

大学という同世代集団の中で日々を送っている学生にとって、違う世界を生きてきた「人生の先輩」の体験を聴かせてもらうことは、キャリアを広い視点で考えることにもつながる。特に新設2年目でまだ卒業生のいない本学科の学生にとって、多様なモデルがあるということとは有意義であると思われる。

⑤ 学生間の学び合い

第2クールの間に年度が替わり、新入生を迎えたことで、学生スタッフは2学年構成となった。学年による役割分担などは特にしていないが、学生スタッフの人数が多い日には、2年生が子どもたちと遊ぶ役を1年生に譲って全体のサポートに回ったり、1年生が2年生の動き方を見て参考にしたりと、先輩・後輩間で学び合う様子がみられた。活動記録からも「1年生が初めてにもかかわらず積極的に子どもたちと遊んでいてすごいなあと思った。お母さん方とも積極的に話をされていて感心した」（#15）、「先輩が手洗いを教えているのを見てすごいなあと思った」（#18）など、他の学生スタッフの子どもとのかかわり方に刺激を受け、自分のあり方を見つめ、成長していこうとする姿がうかがえる。

（2）ダンスを軸にした子育て支援のメリット

各地で様々な子育て支援の取り組みがなされている中でも、ハワイアンフラというダンスを軸にした活動は他に見あたらず、その点が本活動の大きな特徴である。ダンスを軸にした子育て支援にどのようなメリットがあるのかということについて、スタッフ、母親、子ども、教室全体、それぞれの側に立って検討してみたい。

① スタッフにとってのメリット：何かを「してあげる」意識から自由になれる

近年、対人援助職のバーンアウトによる休職・退職が社会問題となっており、教育・保育・心理等の子どもにかかわる専門職も例外ではない（水澤，2007）。対人援助の仕事は、「援助者－被援助者」という「二者関係」が強調されることが多い。そこでは、「援助をする」主体は援助者であり、「何かをしてあげなければ」という強迫的な責任感にとらわれることで、援助が独善的になったり、援助者のストレスが増大したりということにつながっていきやすい。

しかし、特に心理的援助においては、援助者が何かをするというより、本人が自ら答えを

見いだせるような場を作り、守ることこそが援助者の仕事である。ダンスという営みを介在させることにより、援助者は二者関係の呪縛から自由になり、安心できる居心地の良い場を作る、喜び合う、楽しみ合う、という目に見えない仕事にエネルギーを注ぎ、またそこからエネルギーを得ることがしやすくなると考えられる。

② 母親にとってのメリット：バランスを取り戻す

乳幼児を育てる母親は、常に「自分のため」より「子どものため」を優先し、「母親」としての役割を果たし続けることが求められるという、非常に心身のバランスの取りにくい状態にある。そのような母親にとって、ダンスのもつ「他者のためではなく、自分のために動く」という特性は、心身のバランスを取り戻すために有効であると思われる。育児はきわめて身体的な営みであるが、全てが「子どものための動作」であると言える。ダンスは「自分のための動作」であるからこそ、心身をリラックスさせる効果がある。

また、前稿で述べた「同じ空間で別々の活動」をするというスタイルは、「完全に離れたわけではないが自分が楽しめる時間を持ちたい」という、母親のニーズに即したものである。隔週ペースで1時間ずつというわずかな時間であるが、華やかな装いや女性らしい動きをすることを通して、「母親であること」だけでなく「ひとりの女性であること」を味わえることは、母親としてのアイデンティティを保ちつつ、ひとりの女性としてのアイデンティティも確認できる機会なのではないだろうか。

③ 子どもにとって：大人が楽しむ姿に触れる

子ども向けのダンス教育は数多くあるが、親子フラ教室ではレッスンの対象は主に母親であるという点が特徴的である。しかし、子どもたちも自由にダンスを学習している。レッスン中の子どもたちは、自由に好きな場所へ動き回り、好きなおもちゃで遊びながら、曲がかかると駆け寄ってきて、母親たちと一緒にステップを踏む。『『アロハ・エ・コモ・マイ』も踊ってくれていたので、家でのことを聞くと、フラの音楽をかけてとお願いするそうで、聞くと機嫌が良いそう』（#20）などの報告から、親子フラ教室でのダンスが、楽しい体験として家庭に持ち帰られ、親子の生活の中に息づいていることがうかがえる。ダンスの効果については今のところ母親による報告から推測するしかなく、直接的な検証は行っていないが、大人が楽しんでいる姿を見て模倣するということは、幼児期にある子どものダンス経験として大きな意味を持つのではないだろうか。中学校でのダンス必修化などの影響により、低年齢の子どもがダンスに触れる機会が今後増えていくと予測される中で、強制されないダンスの楽しさが子どもにどのような影響を与えるのか、検証していく必要があると思われる。

④ 教室全体にとって：「非言語の世界」「外の世界」に開かれやすくなる

子育ては、きわめて身体的・非言語的な営みである。子育て支援に携わる者にも、非言語

的な世界を共有する感受性が求められる。参加者全員が非言語の世界を共有しやすくなることは、ダンスを軸として子育て支援活動を行うことの大きなメリットの一つである。

さらに、親子フラ教室は、当初から「グループ」の形態での子育て支援活動であったが、ダンスがあることで、同じメンバーが「チーム」としての側面を持つようになった。すなわち、ダンスチームとして、「外へ向かって発表する」という目的でつながることになった。このことは、成果を披露し、観客に喜んでもらえるという、ダンスの特長があってこそのことである。ダンスを通して社会に貢献できるということは、親子にとっても学生にとっても、充実感を得て自尊心を高める機会になるのではないだろうか。前述したように、発表活動は親子フラ教室の主目的ではないため、参加しない自由度も保てるように留意すべきであるが、大学の中だけで完結するのではなく、大学の外とつながっていくという観点をもつことで、活動が閉塞的になるのを防ぐことができると考えられる。

(3) 重層的関係性を生きる

前稿では、親子フラ教室の参加者である子ども、母親、学生、教員それぞれが支援者でもあり被支援者でもあるという関係を、「相互支援の関係性」として考察した。ここでは枠組みを「支援者－被支援者」関係からさらに広げて考えてみたい。

家庭における親子関係、大学における教員－学生関係は、いずれも上下関係を含んでおり、「育てる－育てられる」「教える－教えられる」役割が固定されやすい。しかし、本来「教える－教えられる」、「育てる－育てられる」関係性は相互性や対等性も含んでおり、双方を活性化させることにより、子育ても大学教育も風通しの良い互恵的なものになる。

親子フラ教室では、子どもたちが学生や教員を助けてくれる場面がたびたび見られる。学生の自作曲弾き語りの時に一緒に歌い踊ってくれた場面（#17）が象徴するように、いつも親子フラ教室という「場」を成り立たせているのは子どもたちである。さらに言えば、立場や役割のため遊びにくくなっている大人たちが、子どもたちに遊ばせてもらっているという言い方もできる。ウィニコット（1971）は、「精神療法とは2つの遊びの領域を、患者の領域と治療者の領域とを、重ね合わせることである。もし、治療者が遊べないとしたら、その人は精神療法に適していないのである。（中略）遊ぶことがなぜ必須なのかという理由は、遊ぶことにおいてこそ患者が創造的になっていくからである」と述べている。親子フラ教室は狭い意味での「治療」を目的としたものではないが、このウィニコットの考えは、子育て、子育て支援、そして教育における「遊び」の意義に通じるものである。そしてこのように考えると、親子フラ教室での子どもたちと大人たちは、遊ぶことを通して、お互いに相手が創造的になるための治療者的役割を担っているとも言えよう。

また、学生たちは子どもたちに育てられつつ、子どもたちのことを母親に教わる、手遊びを教える、という学生だからできる役割を果たしている。母親たちも、子どもたちの保護者としてまた女性の先輩として学生に教え、ダンサーとして育ち、様々なアイデアとスキルで

フラ教室を育てている。教員も、枠組みを準備すること以外の部分では、子どもたち、学生たち、母親たちから教わり育てられている存在である。

このようにして、親子フラ教室では参加者が重層的な関係性を生きている。それを支えるのが「共に踊る」ことである。子ども・母親・学生・教員は、子どもたちとフラというダンスを中心としてつながり、共に踊る喜び、育ち合う喜びを共有している。

4. おわりに

本稿では、2011年10月～2012年9月における親子フラ教室の活動を報告し、その変容・成熟過程について考察した。前稿で課題として残されていた、子育て支援活動におけるダンスの効果や学生への教育効果の実証についても、検討を加えた。以上を踏まえて、今後の活動上および研究上の課題を挙げる。

(1) 活動上の課題

① 活動内容の広がりや深まり

2012年10月21日、なでしこ祭の「ダンス大会」に親子フラ教室の有志が出場し、優勝した(図8)。詳細な報告は次稿に譲るが、今後も定期的な活動のプラスアルファとして、フラを披露する機会が増える可能性がある。福祉施設への慰問などのアイデアも出ているが、そのような学外活動をどう位置づけると良いか、検討しておく必要があるかもしれない。



図8 なでしこ祭・ダンス大会

また、これまでは「現代フラ」のみを練習してきたが、参加者には伝統的な「古典フラ」への興味も生まれている。自然にフラを深めていくことができるよう、レッスン内容の工夫も検討したい。

② 学生の役割の拡大

教育的課題としては、学生の主体性をさらに発揮できるようにすることが挙げられる。学生はボランティアとしての参加であり、スタッフミーティングの時間が確保しにくい等の難しさもあるが、活動の中に少しずつ学生主導の部分を増やしていくことが課題である。

(2) 研究上の課題

① フラが踊り手に及ぼす影響の検討

前稿でも今後の課題として挙げていたが、様々なダンスがある中で、フラを選択することのメリットとは何か、フラの特性とは何か、踊り手に何をもたらすのか、ということについてはまだ十分に検討できていない。短期的・長期的な影響を明らかにしていくことが求めら

れる。

② ダンスを軸にした子育て支援の長期的効果の検証

本稿では、ダンスを軸にした子育て支援のメリットについて検討したが、まだ活動を始めて1年数ヶ月が経過したばかりであり、子ども、母親、学生それぞれに対する長期的なメリットについては、今後数年をかけて検証していく必要がある。

謝辞

いつも笑顔で快く迎えてくださるこども園のスタッフの方々、温かく見守り応援してくださっている教育心理学科の先生方、そして本活動に参加し、研究への協力および活動内容の公表を快諾してくださった親子・学生の皆さんに、深く感謝いたします。MAHALO.

5. 引用文献

町田章一 2012 ダンスセラピーの概要. 大沼幸子・崎山ゆかり他（編著）ダンスセラピーの理論と実践. ジアース教育新社

水澤都加佐 2007 仕事で燃えつきないために一対人援助職のメンタルヘルスケア. 大月書店

山田美穂・下山真衣 2012 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の成立・展開過程—ダンスを通じた子育て支援の試み—. 就実論叢, 41, 121-134.

山田美穂 2012 大学における「親子フラ教室」の試み—母親と学生スタッフの体験内容の質的分析から—. 日本心理臨床学会第31回大会発表論文集, 381.

Winnicott,D.W. 1971 *Playing and Reality*. London:Tavistock Publication ウィニコット, D.W. 橋本雅雄訳. 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社